

## 伊那市の山岳トイレの現状と課題

白鳥 孝（伊那 山仲間）

### 【はじめに】

平成 18 年 3 月 31 日に伊那市・高遠町・長谷村が合併して新「伊那市」が誕生しました。

長野県の南部に位置し、平成 23 年 1 月 1 日現在の人口は 71,905 人。日本アルプスと言われる飛騨山脈、赤石山脈、木曾山脈のうち二つを有し、赤石山脈の仙丈ヶ岳、東駒ヶ岳（甲斐駒ヶ岳）と木曾山脈の西駒ヶ岳（木曾駒ヶ岳）など 3,000m 級の山々に囲まれています。また市の中央部を天竜川と三峰川が流れ、豊かな自然と歴史・文化が育まれた自然共生都市です。

市内を南北にはしる中央自動車道や国道 153 号などの幹線道路が整備され、東京・名古屋のほぼ中間に位置していることから、商工業にとっても優良な立地条件であるとともに、観光地としての位置づけも備えています。特に「天下第一の桜」と称される高遠城址公園の桜や、仙丈ヶ岳を中心とする南アルプス国立公園、さらに中央アルプスの将棋頭山周辺の県立公園は伊那市を代表する山岳観光資源です。

### 【伊那市の現状と課題】

木曾山脈（中央アルプス）将棋頭山直下に映画「聖職の碑」でも有名な、大正 4 年の遭難を機に設置された「西駒山荘」があり、毎年 7 月から 10 月までの期間、有人営業を行っています。

この山荘では昭和 57 年にトイレの改修を行い、それまで垂れ流しで処理をしていた状態から、携帯（袋式）トイレを導入いたしました。

このトイレの利点はなんと言っても初期投資が少なく、設置が容易なことではありますが、利用方法を知らない登山者も多い日本では、利用前の説明が必要であることから、有人の小屋でないと対応が困難である点がマイナス要因としてあげられます。

西駒山荘でも通過の登山者が間違った使い方をして、施設を汚してしまったというケースも幾度かあったと管理人がこぼしていました。

また、伊那市の管轄する山小屋山として赤石山脈（南アルプス）の北沢峠に「長衛荘」、仙丈ヶ岳直下には「仙丈小屋」が設置されており、五合目（通称：大滝の頭）からの巻き道の途中に「藪沢小屋」があります。

長衛荘、仙丈小屋は水洗式のトイレが整備されていることから、利用者からの苦情もほとんどなく、快適に利用がされています。しかし、水洗式トイレは初期投資に多額な費用を必要とし、浄化槽の維持管理に係るランニングコストも大きな負担となっています。

仙丈小屋は平成 11 年度、長衛荘は平成 13 年度に「山岳環境保全施設整備事業」（1/2 補助）を導入し、設置を行ってきました。登山者や宿泊者の利便性、快適性を求めれば水洗式トイレは欠かせない存在となってきています。

また伊那市の最南端に市内最高峰の塩見岳があり、そこから一番近い山小屋として「塩見小屋」があります。この小屋も、伊那市の管轄であり、携帯トイレを導入しています。やはり、有人小屋であるからこそできるトイレの利用です。

中央アルプスの西駒山荘は、大正4年に避難小屋として建設されて以来、本体部分はほとんどが当時のまま現在に至り、老朽化が著しく進んでいます。石室は当時の面影を残し、歴史的には大変に貴重なものでありますが、利用者や管理者の立場からすると、隙間だらけで寒く、決して快適なものとは言い難い状態となっています。

今後近いうちには小屋の建て替えも必要となってきていますが、県立公園内の小屋に対応できる補助もなく、財源の確保が厳しい状況です。トイレの改修を同時に実施すれば、仕分け対象で3年間に限られてはいますが、トイレに関しては県の事業を導入することも可能です。

南アルプスの長衛荘、仙丈小屋、藪沢小屋、塩見小屋についても有人小屋として経営をしていますが、施設の老朽化や年間の維持管理費は多額なものであるとともに、利用者のニーズに合わなくなっているなどの施設があり、今後の方向性について検討が必要となっています。

このように伊那市には多くの山岳施設があり、伊那市としては山岳観光を重要視していますが、中央アルプスは宮田村、木曾と接しているとともに、中央アルプスロープウェイが重要な位置を占めていますし、南アルプスは山梨県と接し南アルプス林道バスが重要な位置を占めています。他市町村の状況をみる中で広域的な視点から検討を重ねる必要があり、特にこれからは近隣市町村との連携も重要となってくると感じています。

伊那市の山岳地帯には紹介した西駒山荘、長衛荘、仙丈小屋、塩見小屋、藪沢小屋といった有人の山小屋をはじめ、中央アルプスには大樽小屋、南アルプスには六合目小屋、松峰小屋といった避難小屋も点在するわけですが、トイレの設置はなく、利用者は小屋周辺で処理をしていると思われます。現に東駒ヶ岳(甲斐駒ヶ岳)から鋸岳へ進む道の途中にある六合目小屋は平成18年に改築をしました。それまではあまり利用のなかった小屋であったのですが、改築後の利用者は極端に増えています。登山者の安全を守る意味としては役割を十分に果たしていますが、小屋の周辺には白い花が沢山咲くようになってしまいました。無人の避難小屋に関しては利用者のモラルに頼ることしかなく、強制的に利用者を選ぶこともできない状況です。

この問題は、無人の避難小屋に限らず、例えば西駒山荘のように冬期間避難小屋として開放している小屋でも同様の問題が発生しています。また、小屋に限らず徒行中の処理に関しても同じことが言えます。

海外では携帯式トイレの持ち歩きが常識化してきていると聞きますが、国内においては認知度も低く、賛同いただけるかが問題です。また、全国の山岳関係団体や行政が一致団結して一斉に実施をしないと伊那市だけではとてもできる改革ではありません。南アルプスだけ見ても、登山口は伊那市側、山梨県、静岡県と様々であります。

伊那市だけが携帯式トイレを推奨し、入山者に義務づけることは不可能でありますし、登山口などに回収ボックスを設置したところで、処理に係る経費等の負担も難しいかと思えます。

また、両アルプス共通の課題としてトイレのあり方があります。登山者のモラルも問題ではありますが、自然環境にも配慮をしながら山岳のトイレを考えていく事も必要であると考えます。

一般的には西駒山荘や塩見小屋などで導入している携帯トイレを普及させることが良いとされていると思えますが、携帯トイレも最終的には焼却処分するしかなく、焼却による環境被害を考えると、一概に最適とは言い難いのではないのでしょうか。

しかし、日帰りの登山者や縦走される登山者もいる中で、トイレの普及を図るには携帯トイレになってしまうのでしょうか。従いまして、小屋での処理方式と分離して考えるべきであり、ヘリコプターが飛べる小屋では、カートリッジ式のトイレを導入していくことが効果的と考えます。

カートリッジ式トイレの導入には相応の経費がかかることから、これからの山岳トイレを整備するうえで、国や県の手助けも無くてはならないものであります。

伊那市も近々に小屋の建て替えや、トイレの整備も必要を迫られています。

とはいえ、山岳トイレの環境整備を進めることの重要性は充分認識しているものの、厳しい経済状況の中、苦慮しながら悩んでいるのが正直なところです。